

高部館

たかぶだて



森と地域の調和を考える会
〔木の駅プロジェクト美和実行委員会〕
TEL 0295 15813812

茨城県常陸大宮市高部

戦国時代の の山城跡 高部館

たかぶだて

四百年の時を越えて残る迫力ある遺構

鎌倉時代末、佐竹氏七代義胤よしたねの五男景義かげよしが築城

森と地域の調和を考える会（木の駅プロジェクト美和実行委員会）

常陸大宮市ふるさと文化で人と地域を元気にする事業実行委員会



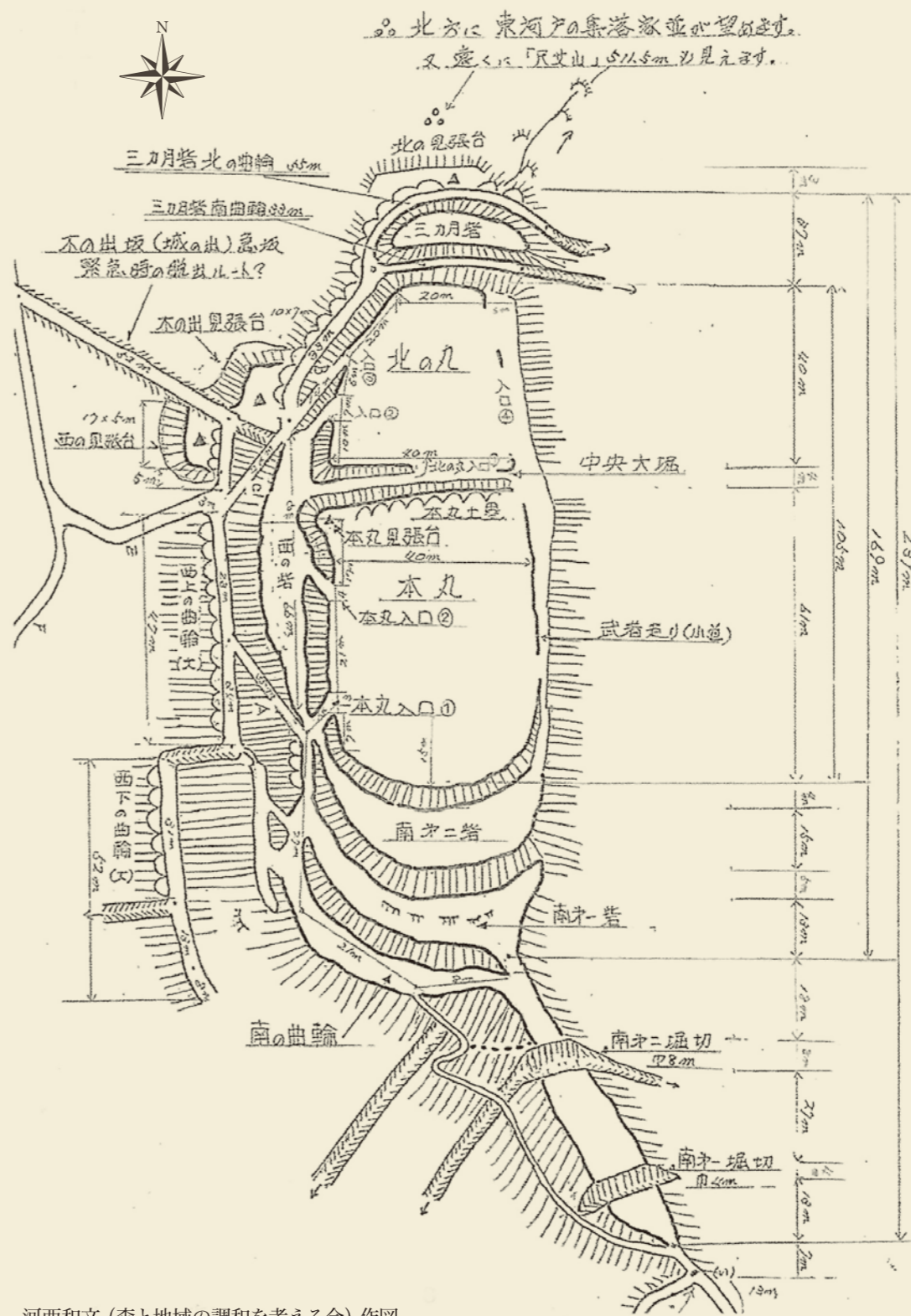
文化庁平成26年度文化遺産を活かした地域活性化事業



高部館

戦国末期の戦闘城郭です。居住性、要害性を備えています。
佐竹景義が鎌倉時代に築城し、高部氏を称しました。

城のある場所は、馬頭鳥山方面から佐竹氏の本拠、常陸太田方面へのメインルートであり、佐竹氏はこの城を重視していたと思われます。高部付近が緒川の谷が最も狭まるため、この地を防衛のための前線拠点にしたものと思われる。現在も子孫がこの地に住んでいます。



河西和文 (森と地域の調和を考える会) 作図



森と地域の調和を考える会の取り組み

歴史的遺産や自然を地域の宝と考え、未来へ継承していく活動に取り組む中で、高部館の歴史的価値を「茨城大学中世史研究会」の調査報告会で知り、長い年月の間草木の中に埋もれて来た館の整備に取り組み、現在、高部館はその全体像を現して来ました。会の整備によって茨城大学中世史研究会の調査も進み、高部館が茨城県内に残る山城跡の中でも大規模で、歴史的価値も高いことがわかって来ました。

茨城大学中世史研究会の調査

- 2005年 茨城大学人文学部と常陸大宮市との間に「地域連携に関する協定」
- 2006年 提携事業「森を活かしたまちづくり協議会」
⇒「常陸大宮市域の山城跡・山岳霊場とその周辺の活用できる資産に関する分布調査」
- 2009年 シンポジウム「よみがえる戦国の城」
特別展「館(たて)と宿(しゆく)の中世—常陸大宮の城跡とその周辺—」
ヒストリーツアー「常陸大宮 戦国の城をゆく」
- 2014年 当事業により縄張り調査を実施



変遷

- ◆築城から数代にわたって高部氏が治める。
- ◆佐竹氏最大の内紛「山入(やまいり)の乱(1408、1504年)」が起こると、1500年頃高部館は山入氏に落されその所有となる。
- ◆佐竹氏が勢力を盛り返し、追い詰められた山入氏義は高部館に入るが、1504年佐竹氏に討たれる。その後、佐竹・東氏の代官が入って治める。
- ◆徳川家康によって佐竹氏が秋田に移封され、江戸時代になると館は廃止されるが、400年の時を越えて迫力ある遺構が残っている。

築城

- ◆高部館は、佐竹氏の七代義胤(よしたね)の五男景義(かげよし)が築城。

位置・構成・規模

- ◆高部館の位置は、山方と馬頭を東西に結ぶ街道と大子へ至る道がT字に交わる交通の要所。
- ◆佐竹氏の領地(対那須氏・白河結城氏)を防衛するうえで、また、軍勢を派遣するうえで重要な拠点。
- ◆西側は緒川が流れ、東側は支流和田川流れる要害の場所、標高は291mあって宿をはじめ周辺を見渡せ、領地を支配するうえで都合のよい場所。
- ◆高部館の構成は、北・東側は急峻な斜面、南・西側は堀切(ほりきり)、堅堀(たてぼり)の防御施設を多用。
- ◆平坦部である曲輪(くるわ)は南北に八つほど連なる。
- ◆高部館の主郭(本丸)は60m×40mの広さを持つ。

一、はじめに

高部館跡の縄張りについては、平成二年(二〇〇九)の余湖浩一氏による調査成果がある(本紙「現況調査図」参照)。しかしその時点では、館跡全体に下草が生い茂り、調査範囲には限界があった。この度、「森と地域の調和を考える会」が草刈り作業を行い調査条件が整ったため、茨城大学中世史研究会では再度縄張り調査を実施した。その結果確認した新たな遺構は高部館の縄張り解釈に関わるため、本稿では再調査の成果を踏まえ、改めて高部館の構造について試論を述べたい。

なお高部館跡では、これまでの山林維持のための間伐作業により、遺構の改変が随所で見られる。こうした箇所は縄張り図中に茶色で示し、縄張り解釈に加えない。

二、高部館の曲輪配置

次頁に図示した通り、城内にはIからXまで一〇個の曲輪がある。以下、曲輪ごとの特徴を述べる。

◆曲輪I

南北方向に延びる城郭遺構の中心部であり、城内で最も広く、主郭(本丸)にあたる。東側は急斜面であるが、北側を曲輪IIに、西側は曲輪IIIに、南側は曲輪IVによって守られる。

曲輪Iは北東部が北に向け張り出し、曲輪IIとの間の空堀に折れを構成する。曲輪Iの北辺には東西方向に土塁が残り、張り出し部分で重厚となる。この地点ではIIへの援護効果以外にも、堀底に侵入した寄せ手に対する横矢効果が想定できる。また曲輪Iの北西端では土塁が消え、代わりに曲輪自体が西に大きく張り出し、堀底道を隠す役割をもつと考えられる。

曲輪Iには虎口状の開口部がaからdまでの四ヶ所にみられる。まずaについては開発痕がみられ、虎口gを通り曲輪Iに向かう際、最短で直進できるaの位置に虎口を設けるとは考えにくく、後世に削り出されたと思われる。しかし、この位置に城門を設けて戦時には遮蔽した可能性は残す。次にbは、曲輪IV内を経由して曲輪Iへと東側より入る虎口であり、今回の調査により新たに確認した。cは、西側直下の曲輪III西端部にも崩落痕があり、これとともに後世の改変によるものと考ええる。dは、戦時に寄せ手が最終的に迫りつく虎口といえる。現在明確な地表遺構はみられないが、曲輪I東側下の武者走り状遺構との関係を考えて、この地点に虎口があったと推測できる。

曲輪IIは、曲輪Iに次いで城内二番目の広さをもち、いわゆる二ノ丸にあたる。曲輪Iの北側を守る役割があるが、直接的に曲輪Iと連絡する道は確認できない。

曲輪II内部は平場の削平が甘く、緩やかに北方へ向けて傾斜する。主観では、曲輪の中ほどを境に、南北二段に分かれている。曲輪Iとの間の堀底道は、城内防衛の最終地点といえ、この堀底に敵を侵入させないために曲輪IIの南西部が張り出し、Iの北西部張り出しとともに、堀底道への敵の侵入を妨げる。

曲輪IIの虎口は、eとfの二ヶ所に想定できる。まずeは、帯曲輪状の曲輪IIIを通り、曲輪I・II間の堀底へ入らずに直進し、曲輪IIへと到達する際の虎口である。次にfについては、曲輪IIの北辺土塁の東下部が堅堀に向けて開口しているため、この部分から武者走りへと入り、更に土塁南側の内湾部から曲輪IIへと入る虎口を想定したい。曲輪IIの北辺土塁が東端で厚みを持つのも、このfを防御するためと考えられる。

曲輪IIIは、曲輪IIの北辺土塁の東下部が堅堀に向けて開口しているため、この部分から武者走りへと入り、更に土塁南側の内湾部から曲輪IIへと入る虎口を想定したい。曲輪IIの北辺土塁が東端で厚みを持つのも、このfを防御するためと考えられる。

◆曲輪IV

曲輪Iの南側下を準備する。曲輪Iとは虎口bを通じて連絡する。虎口gを突破して曲輪Iを目指す寄せ手を、城兵が食い止めるための空間と考えられる。また、虎口gに対する横矢や、曲輪V・VIIに対する支援も担う。

◆曲輪V

曲輪Vは曲輪IVの南側下を準備する曲輪である。城内

中心部へと続く虎口gを目指す寄せ手を、側面より攻撃する。

曲輪VI・VIIは曲輪Vと一体であり、南方の二本の堀切を越えて虎口gに迫る寄せ手に対し、側面攻撃を行う。

◆曲輪VII

曲輪IIの北側下に位置する。二本の堀に囲まれ半円形状をなすため、東・北・西に対し広射角をもち、北方より城内中心部に近づく寄せ手を監視・攻撃する。曲輪内部の削平は甘く、東に向けて緩やかに傾斜する。高部館を西側から攻める際、この位置から侵入しても、長大な堀底道を通りこの曲輪へと迫りつく。

曲輪IXは、便宜上一つの曲輪番号を振ったが、削平の甘い数段(五段か)の帯曲輪の集合体である。高部館の北西の谷を準備する。その最上段は曲輪II・VIIIを包み込む土塁状を呈し、曲輪の縁取りが鮮明で随所に張り出しもみられる。その南端部には虎口hが設けられ、曲輪II・VIIIへと向かう堀底道に続く。また、各段ではすべて南端部が西に張り出し、城内最長の堅堀Iへの監視を強めている。なお、この曲輪群は、今回の草刈り作業により細部が明らかになった。

◆曲輪X

堅堀Iを挟むかたちで曲輪IXの対岸に位置し、ともに堅堀の監視を担う。東辺の土塁は南に長く伸び、曲輪IIIとの間の長大な横堀を形成する。

三、高部館の防御構造

ここまでみた各曲輪の特徴と曲輪間の関係性をもとに、戦時に寄せ手が侵入する城道を復元したが、縄張り図中の青線である。その結果、高部館は北西・南西の谷や西の尾根上など、主に西側(那須方面)から攻め寄せ敵に対して備えた城といえそうである。

高部館は東麓に根小屋・宿を持ち、城が守るべき「内側」は東下方といえる。城の南方の狭隘な谷筋には、東西方向に街道が走り、緒川を渡河して宿に入る

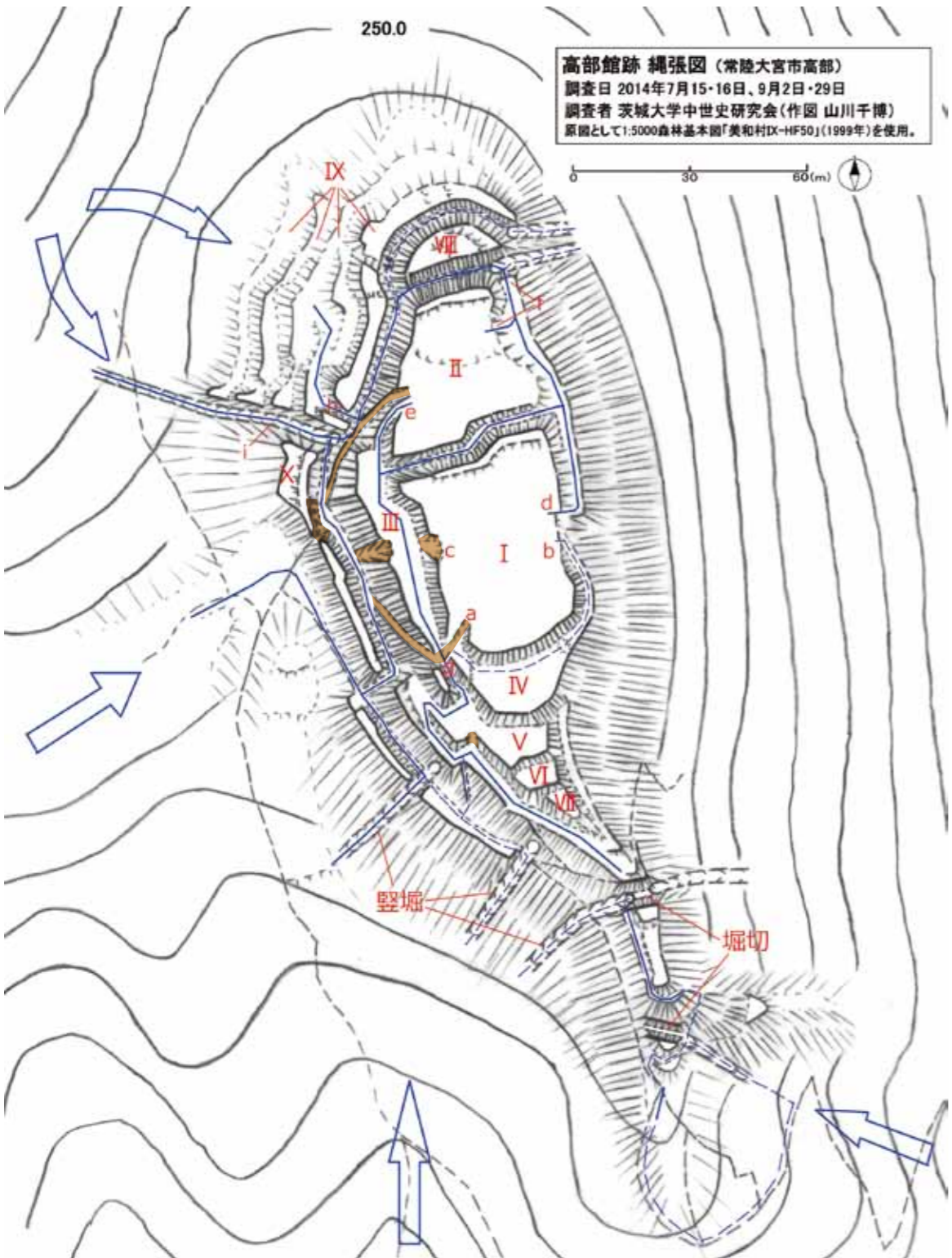
が、高部館はこの地点を対岸の「向館」と挟み込む形で守備している。つまり、那須方面から高部館を東を目指し、まず高部館を攻略しなければならぬ。必然的に城の防御意識は「外」である西方向に向かう。西側随所に設けられた堅堀は、斜面の横移動を妨げるとともに、城内への侵入路を、堀底道に限定する。さらに堅堀を登り切った先は、また必ず堀底なのである。西側のどの地点から侵入した寄せ手も、結局は城内最北部の曲輪VIIIへと続く長い堀底道を歩くこととなり、その途上で直上の曲輪からの横矢に晒され続ける。最終的には曲輪II・VIII間の堀底を通り、曲輪IIの北東部虎口fを目指さなければならぬ。このように西側では、常に堀底道に敵を誘引して上方から横矢を射懸けるという、少人数でも守りうる防御構造をもつ。

一方、南側にも防御遺構と城道がみられる。城の南東方向からの攻撃への対処である。この方向から高部館を攻める場合、中心へと向かうためには南北二本の堀切を越えなければならない。とりわけ北側の堀切は規模・落差が大きく、ここを登るのは容易ではない。堀切を越え城内に侵入した後は、上段の曲輪V・VIIからの攻撃に晒されつつ、折れ曲がる道を、虎口gを目指して進む。このgは、城内で最も発達した虎口であり、西側の櫓台土塁と曲輪I・III・IVにより堅固に守られる。この先が城の中心部であり、ここを突破できるかどうかは攻城戦の決め手となる。その戦いは、虎口gに集中する寄せ手と、各曲輪に駐屯する城兵との白兵戦となるだろう。

このような、西と南の防御構造の違いは、想定される戦いの局面の差によるものと考ええる。つまり、西側から攻撃される段階は、監視と撃退を主目的としており、日常の防御構想といえる。一方で南東方向は、宿から城南東の字「立坂」を登り到達する城の大手道であり、そこでの戦闘は、東麓の宿を突破された後の、最終的な籠城戦の段階である。そのためこの方向には、城兵による直接戦闘を想定して、より多くの曲輪に駐屯地が配置されているのだろう。

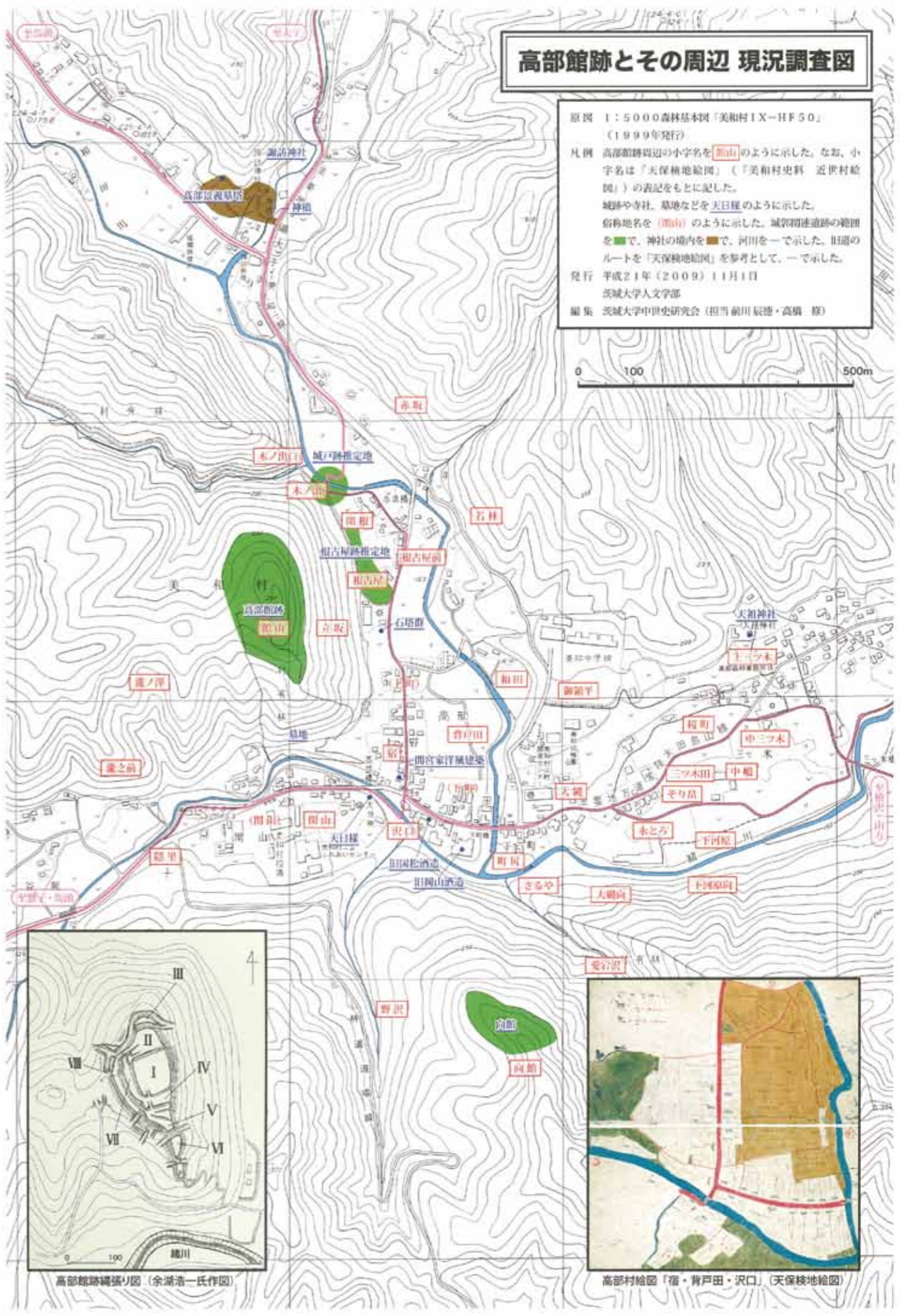
以上、城の「内」と「外」という視点から、高部館の防御構造を分析した。高部館は、西側と南側の縄張りが発達し、各段階における戦闘に備えていた。双方に共通することは、より長く敵に城道を歩かせ、その間に数を減らし疲弊させるための縄張りをもつことで、これが高部館最大の特徴といえるだろう。

高部館跡 縄張り図 (常陸大宮市高部)
調査日 2014年7月15・16日、9月2日・29日
調査者 茨城大学中世史研究会(作図 山川千博)
原図として1:5000森林基本図「美和村IX-HF50」(1999年)を使用。



高部館跡とその周辺 現況調査図

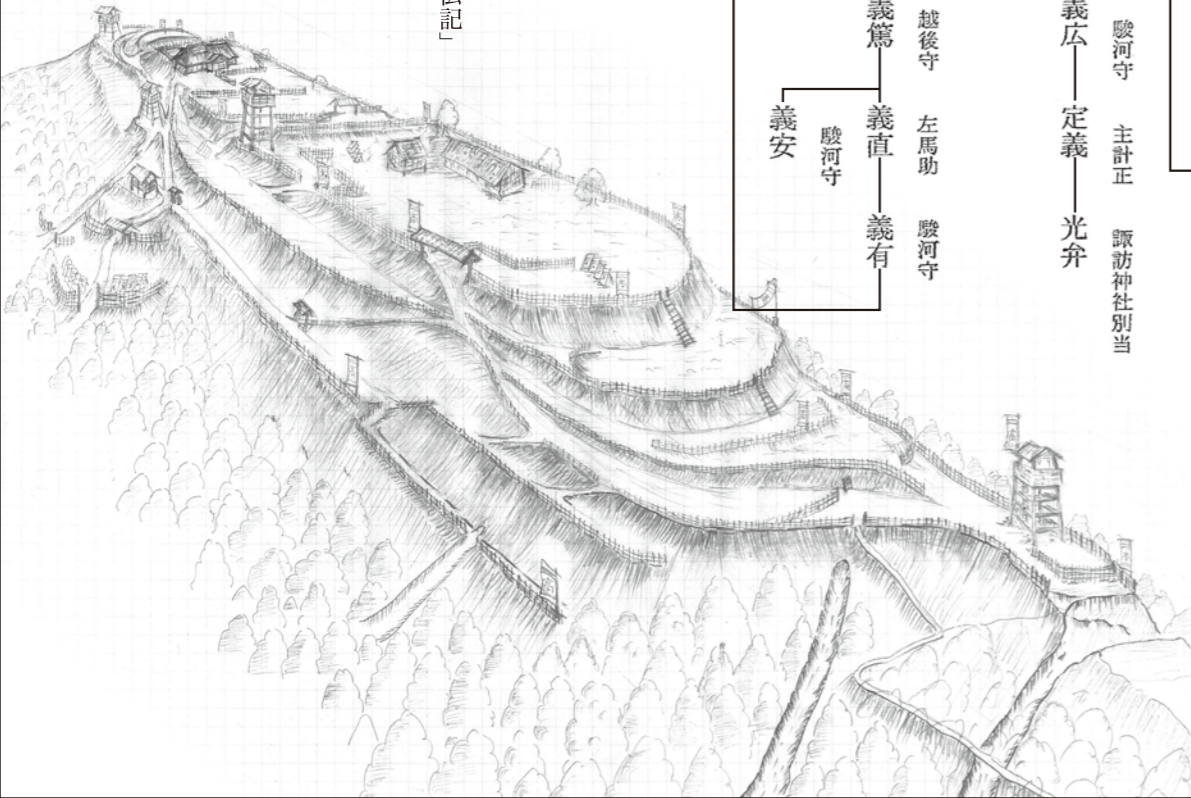
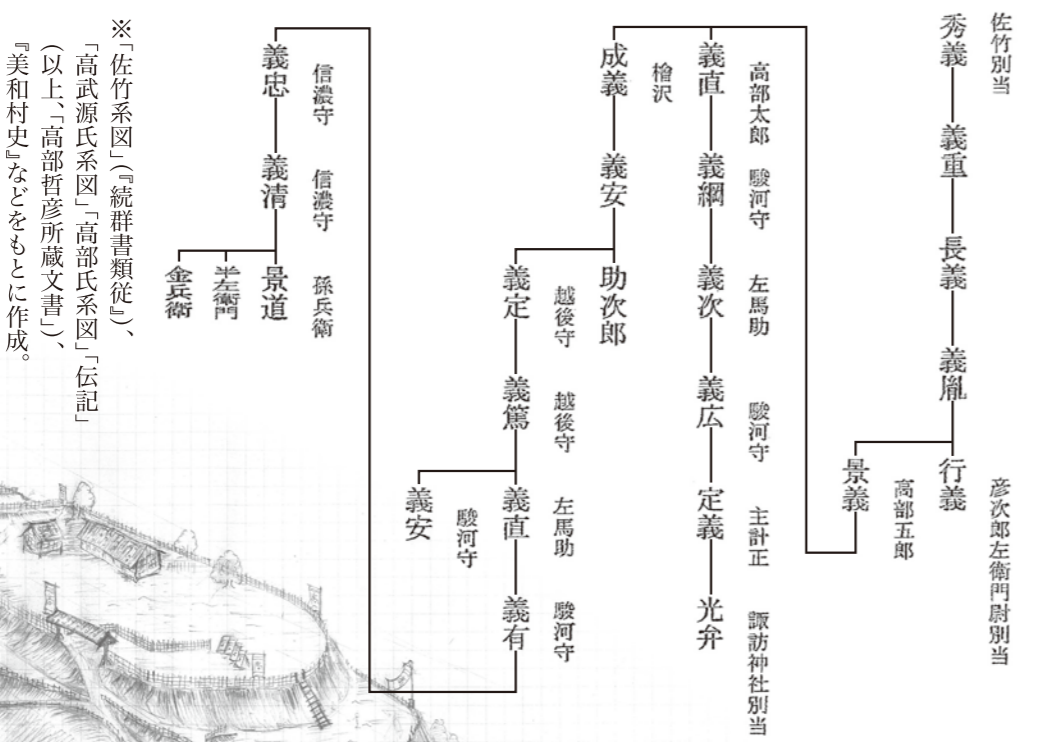
原図 1:5000森林基本図「美和村IX-HF50」
(1999年発行)
凡例 高部館跡周辺の小字名を(山)のように示した。なお、小字名は「天保検地絵図」(『美和村史料 近世村絵図』)の表記をもとに記した。
城跡や寺社、墓地などを天日種のように示した。
俗称地名を(山)のように示した。城郭関連道路の範囲を(山)で、神社の境内を(山)で、河川を一で示した。日置のルートは「天保検地絵図」を参考として、一で示した。
発行 平成21年(2009)11月1日
茨城大学文学部
編集 茨城大学中世研究会(担当 前川辰徳・高橋 勝)



佐竹氏と那須氏の抗争年表

- 延徳4(1492) 佐竹義舜、長倉城と野田郷を除く長倉領を那須左衛門太輔に割譲し、山入氏との戦いに参陣することを求める。
- 永正11(1514) 古河公方足利政氏・高基の戦い。政氏の出陣要請を受けた佐竹義舜は、岩城氏とともに、高基側の宇都宮忠綱を攻める。
- 享祿2(1529) 部垂城主小貫俊通、佐竹義元に攻められ落城する。これを契機として部垂十二年の乱が起こる。
- 天文8(1539) 那須政資・高資父子が対立・抗争する。政資を支援するため、佐竹義篤・宇都宮俊綱・政治が烏山城周辺を攻撃する。
- 天文8前後 佐竹義篤、大繩左京亮に那須政資を援けて下那須向田口を攻撃することを命令する。大繩左京亮、高部・松沢・小舟・小瀬・野口・東野の地侍を番衆に編成し、下那須攻撃に動員する。
- 天文9(1540) 佐竹義篤、部垂城を攻撃する。
- 天文10(1541) 那須高資と佐竹義篤が和議を結ぶ。
- 弘治3(1557) 那須資胤と佐竹義昭が和議を結ぶ。
- 永祿6(1563) 那須資胤、佐竹氏に敵対する小田氏治・白川晴綱と結ぶ。
- 永祿8(1565) 那須資胤、那須氏一族の興野氏が大海山(大崖山)における佐竹氏との戦いで、敵兵28人を討ち取ったことを褒め、7貫文の土地を宛行う。
- 永祿9(1566) 那須資胤、8月24日の治武内山合戦で東義政を降伏させる。
- 永祿10(1567) 那須資胤、2月18日の大崖山の戦いで佐竹義重を敗走させる。
- 永祿13(1570) 佐竹義重、那須氏に与する千本城、興野城・烏山城を攻撃する。
- 元龜3(1572) 佐竹義重と那須資胤が和議を結ぶ。
- 天正10(1582) 佐竹義重と那須資胤が和議を結ぶ。

《系図》高部氏略系図



高部城イメージ図
河西和文 作図
(森と地域の調和を考える会)